果てしなき鼓動

ハァモニィベル

潤 朱 【ウルミシュ】

ポエジーが何色なのか、オレは知らない。
何色のポエジーをお前が欲しがってるのか、オレは知らない。
〈詩情経済〉の鬼市では何色が光り輝くのだろうか？

沈黙交易の向こう側で、
お前が静かに流してる涙を、、
拭いてやれもしないクセに
もっと溢れさせた涙の、
一粒が落ちる音が
いつか聞こえる日が来る
なんて、
錯覚を塗り篭めたこの指に

指に膠り着いた潤朱の

今は、どこまでも、ただ、
燻んだ色しか見えぬ歳月を透して
やがて、鮮やかに光る
褪色のないこの輝き

Prologue2

形容詞が裸になって
軽く震えている
輝る空を背景（バック）に君の眼は灰色
複雑に構築された足跡の「定義」―を見つめ、
明日の献立に
太陽を茹でる
ポエジーのために。

氷の線律

氷点下の戦慄が
呼び鈴を押し
ドアノブを右へ回すと
すべては盲目のまま
落下する

蝋で出來た
写実の内側（なか）へと
マルデ
他者のような戦慄が
太陽を背に浴びて
降りそそぐ
その中を

落下する
ただ
貌（かたち）という
貌（かたち）を
溶かしながら

愛し合うふたり

凍りつくほど寒いその国で王子は姫を探しつづけた
冷えきった身体を森の小屋で温めるには、その暖炉はちょうどよかった
暖炉は、本当は姫の居所を知っていた
が、しかし、ずっと、黙んまりを続けた 。
なぜなら

　　その中で燃えていたから

王子の凍えた心に火を点けて救う為だと、
暖炉がそう言って
そそのかしたことは、
他に誰も知らない
ただ、奥から炎が、目の前の王子に向かって切なく吠えるのを 暖炉は、
ゴーゴーパチパチと抑えつけ　ぬくぬくとだまり続けた。
身体を暖めた王子は、
なにも知らぬまま
見当違いの方角へ旅立っていった。
必ず姫を探し出すと、心に永遠の炎を燃やして

Ｉ．

詩

樹晶夜　*DENDRITE NIGHT*

足跡を捨てながら
帰り途を急ぐ

　その歩数と
　　掛け算するように

夜の密度が
　濃くなっていく

粘度を増して
重く絡みつきはじめた
暗闇の

後ろ姿しか
　もう
見えない。

姿の無い
透き通った戦慄が
肌を
摺り抜ける

その度に、

殺意のような汗が、
背中で、びっしょり微笑む。

　憂鬱を

　笑うような速度で
　這うように

　微笑む

　*

やがて、
樹状に

どこまでも
　樹状に
分岐しながら・・・

何時でもない世界
に
 デジタル時計のような高層ビル

　一瞬の
この場所から

もう
帰れない、と
知った

偽りが揺れる波間で
忠告に押し潰されながら
肌に喰い込んでいく
「幸福」の声

繰るように
広げられ、返される
その、

「主と悪魔の」戯れのような

樹状に拡がる世界の
不安なやすらぎ

　*

突然、知らない音楽が流れ出す
真夜中に

腹を抱えて笑い
転げ
落ちた
濃いコーヒー

音量は破裂するように跋扈し

手がかりだけがビチョビチョ

黒い液体の一つの流れが
まるで獲物を狙うように床を這っていく
憂鬱を笑うような速度で・・・

樹状に
どこまでも
分岐しながら・・・

明日もまた配達される

廻っている世界に溶け込む《痛み》

　　マンデヴィルの蜂に
　　刺されたような・・・

　樹状の《痛み》
　　が、
　シミュラクルに拡がっていく・・・

樹状に拡がる世界の

何処か一つでもまた

寝不足のカナリヤが
　哀しく、樹状に
　夢を切り裂きはじめた

朝が眠る部屋の中で

ペルセポネの悲しみ

喉に巻きついた嘘の鎖
　　ぶちまけて掻き消した眼差し
　厭うべきものはなく
　　ただ、最後まで待てぬことばかり
　　燃える羽毛の檻の中で
　　暴き出され そそり勃った毒牙

　　*

唇を拭う絨毯
　　頬杖に捧げられた気懈さ
　与えられたものはなく
　　ただ、途中まで掴み取れぬものばかり
　　怒り狂う200gの睡魔に
　　彷徨う片隅で 眉を顰めた時計

　　*

痺れて動けぬ青空
　　虚無が遊ぶ公園
　亡くなった者は哭く
　　ただ、途中から干枯らびる者ばかり
　　白い頭蓋骨の砂漠に
　　足を噛まれた 機械仕掛の屍

　　*

幽玄な臭いローファー

　　塗りたくった洗濯物の鼓動
失われたものはなく
　　ただ、始めから無かったものばかり
　　刃の花束を抱えこんで
　　もがき伏し 啜泣く女神

美しい薔薇も見ないで

背中に一本の薔薇を生やした猫が
窓辺に座って、ずっと外を見ていた
一度だけ晴れてみたいという
空の悩みを聞いているのか
目の前の邸宅の主人のハゲ頭の上に
苔むした狡猾を笑っているのか
隣から聞こえる奥さんの叫び声
「戦争は嫌よ！散らかるじゃないの！」
そんな好戦的な怒鳴り声を聞いているのか

いったいお前は
何を見ているというのだ
背中から伸びた
一本の緑の茎には
左右、四方に、葉が開き
その先端に
美しい赤い薔薇を咲かせたお前よ
いったいお前は
何を見ているというのか

理性が風呂でポテトチップを食べていても
顔を知らない同級生がインターホンを押していても
お前は背中に、
薔薇を一本突き立てたまま、
ずっと外を
見ている

向こうに、幽かに見える
黒染んだ

灰色の
絞首台のある病院に死の予約を待つ行列を見ながら
その無数の人生 1つ 1つ を、
作品として鑑賞しているとでも言うのか

ならば、一輪の薔薇を背負った猫よ
友情の手触りをおしえてくれ
愛情の匂いをおしえてくれ

＊

即興による颯爽が
高飛びの棒を折り、
脂ぎった憐憫と
笑うような陽射しに犯されたあとで
雄弁な聖母が差し出す紛い物の冷たいぬくもりを
吸い取って膨らんだ
　虚無の
　　裏側で
　同情に凍えて、
ふたたび
萎び果てた憂鬱が
過呼吸にのた打つ
慎ましく縮れた
未来に踊る脛毛のように

＊

一輪の薔薇を背負った猫よ
いったいお前は何を見ているのだ

＊
通りで道に迷うチューハイに酔った地理学者の
妻への垂れ下がった無関心　そして
その妻が向ける夫への吐息の爪か

それとも、頑張りすぎた恋物語に　傷ついた少女の

悲観する爪先が叫ぶ金切り声の躊躇か

それとも、乳母車に乗った少年兵の
文字数の足りない憤怒の小銃か

＊

一輪の薔薇を背負った猫よ
窓辺でいったい何を見ている

＊

歴史が吹き飛ばしたものか

それは腐敗する前の肉親たち

埋葬した呵責を上書きする垂れ流しの癒し

焦げた絨毯の上で孵ったのは、
バーコードで分かち合う飢渇した豊穣

＊

嗚呼、猫よ。薔薇を背負った猫よ

どうして薔薇を背に負ったまま
盲目の夜をまえに、盲目のおまえは
ずっと外を眺め続けているのか

Ⅱ.

ソネット

春のかなしみ

冬の雪よりも深い、春のかなしみを
憂えるあまり、咆哮も彷徨もせず、
ただ、ひとり揺り椅子に眠っていたのに、
彼女はとつぜん、

頁をめくるように、
眠りから解かれた。
カーテンの向こうを
通りすぎてゆく朝、

陽だまりを
憎むほどの
午後、

タマネギを
見つめてしまうほどの夜
しか、ないというのに。

愚者ノ眼のソネット

　愚者ノ眼のソネット」

開放もしないくせに、閉じ込めもせず、
何が望みなのだ、世界よ　どうしろと言うのだ、世界よ
燃え上がり、高く、高く登れば、
汗すらも雲の如く氷つくだろう、

凍えながら泪とともに地上に堕ちてゆく、
このざまさえ、笑いもせず、
ただ、じっと、遠くで見ている世界よ。
余りにも冷酷な支配者よ。

※

遥か遠く宇宙までも、極めて微細な細胞内までも、
見とおせる眼鏡をかけながら、
わたしが、見えないのか愚か者よ

わたしはいつだって、仕打だけを記憶したお前を、
ただ包み育んできた、お前の奴隷なのだ。愚か者よ。
わたしは、いつだってお前の眼という解釈の奴隷ではないか。

〈灰色のソネット〉

燃え尽き、まっ黒な灰に
なり、風に散った、
夢がまだ、今も瞼の裏で、
燃えている。

焼けた誰かの夢を、
今日も世界が、
ふぅふぅ吹いて、
食べる音がする。

沈黙の中を落ちていく、雪のような
悲しみは、深い穴の中で、
凍りつき、垂れ下がり、氷柱になる。

まるで昨日のような今日を、
明日も誰かが、フゥフゥ言って、
生きる声がする。

【霧の中で眠る羅針】

ドラマは想像力で成り立っており、
想像力で演じられるドラマが、日々、山脈のように連なり、昼夜、
〈者と者〉あるいは〈者と物〉との谷間をせっせと渡っている。
そのたよりないゴンドラの往復を、多彩なまでに、互いの想像が動かし続ける。

断片的な情報の風が吹き荒ぶ崖を、煽られつつ、
ときに流されたりもしながら、想像というハーケンとザイルを頼りに、
世界も、人も、想像で分かり合ってる。それは―
解説も手引もないまま参加しているこの世界というゲームの本質。

われわれは、何の根拠もない存在でありながら、理由も目的も無い、ぼやけた
霧の中で、論理という絵空事だけが正義を振りかざし根拠を問うことがある。
問い糾せば何の根拠もないこの世の中に向かって。

人生に目的などはないその耐え難い不安の心の穴の上から政治が微笑みかけ、
それに想像力で笑顔を返しながら、今日も、
生命維持装置に繋がれた、たった一つの内面世界の寝顔を、花を持って見舞う。

わが明日へのソネット

昨日のしくみを知らないうちに
すでに今日が問いかける
夕焼の潤むような眼差しの熱さが、
圧倒するようなささやかな爪で、

巨大なオレンヂのなかに私を捕らえ、拘束し、開放した
いつなのかもわからない
夜の、暗闇の奥の奥の、奥に、
命の眼だけが爛爛と燿り、

どこかで、脈が、しずかな猛獣のように
打っている。風下から、夜の筋肉が
全力で、私を押さえつけても。

まるで、歪んだ古い皿の、底のほうに、描れた
青い象の如く、〈歩もうとして歩めない明日〉の、
すべてが、微睡みの影でも。

ソネット♪季節のしりとり

　ソネット♪季節のしりとり

春に置き去りにされた心を、
夏が迎えに来るなんて残酷すぎる。
秋に、勝手に、なるくせに。
冬だけがやさしい。

冬は冬眠して乗り切り――
――春はリラックスして春眠――
……‥・・・・・夏は氷枕で仮眠をし・・・・
―――秋は惰眠を貪る――――――

秋は、枯れ葉。冬は、降る雪。春は、満開の桜。
そして、夏は・・・〈あの球体〉。
秋・冬・春・夏｜色は移ろう｜金茶・白銀・薄紅・…そして…、
切れば、〈黒点のある赤〉。

でも、今世紀に入ってから、
あまり楽しみじゃない夏。

// 韻を踏みつけるソネット

// 韻を踏みつけるソネット

さっき買った魚が、
さっき半額になったことに、
殺気立って憤る奥さんは、
さっき買ってきた物たちが、

さっきからどうにも入らない、
殺菌せよと神が言う、
冷蔵庫の奥がミステリー。
冷静に、冷静に、考えるのだが、

冷酷に、冷酷に、答えてくるのが、
例年、例年、縮んでく、
例により抜けない指輪のミステリー。
礼服を着たオジサンはみんな酔っぱらいだ。

それでも、知的生命体である。
それでも、みんな、知的生命体である。

ガランス のソネット

【 ガランス のソネット （もしくは、滲む記憶のソネット）】

滑べり堕ち、砕け散った破片の
あまりにも激しい叫びが
その一瞬の、すべてを
切り裂く。

慌てながら抱きしめた手を
深く、鋭く、切り裂いた、
あの日の、
傷口から

一筋の想いが
滴り、
始める。

熱く滲み出し、劭する痛みが、
止めどない、心臓の記憶とともに、
ジンジンと、悴んだ手に、濃く蘇る。

罪の楽園

もっと喘いで 優しくするほど狂うきみ
もっともっと喘いで　狂うほど優しくしたいきみ
瞳を見つめ合いながら、
理性の鞘をそっと外して

食器棚の下に落ちている　理性の鞘が
どうしても取れないのと
泣きながら 本能のナイフで
妖しく　林檎を　剥いた　きみ

白い林檎の肌に口唇を這わせば
苦悶の果汁が溢れて、滲む
後ろから、優しく　僕の　灼熱した
すべてを、君の中だけに

突き上げ滾りたつマグマの息は溶解し　仰向けに倒れた君を
狂喜した羽撃きが襲って遥かな世界へと連れ去っていく

ある古代詩のソネット

〈ある古代詩のソネット〉

形の無いものから逃れようと、必死に奔るうちに、
地平線は、もう、どこにも、見えなくなってしまう。
「待機せよ」と　白い少女が起ち上がり祈るが、
またふたたび、真理が降ることは、ないのだ。

黒い芸術が現れ、それが席巻する季節が訪れ、
皆、倣うように、有利な契約を結ぶ作風に勤しむ。
無垢な利益は嘘を吐かない。
恍惚はいつまでも、少しずつぼやけていく。

跋扈するのは、計算された慈愛だけ、になり、
それが、限りない魂の戯れ、を奪い去る。
20××年×月×日

初めて訪れた町で、
名前を失ってしまった時、
君は新しい冠をかぶるだろう。

【 滅亡のソネット 】

腐り果てた空に、虹が突き刺さって風化したまま、
あらゆる感覚が停止した世界の壁に、ベンガラで擦られた、
巨大な死者の伝言が、僅かに一行、掠れもせず遺されていた。
――「背中に刻まれた言霊、犯人は言霊」と。
＊
真っ赤な人生をジワジワと吐出しては、箱詰めにする
マコトしやかな無知の〈ファクトリー〉。
言霊を食い込ませ、迫り来る幻想の激痛を胸に浴びたモノ達が、
他者の焦燥を背負って戦い、自己の憂鬱を勝ち取るべく出荷され続ける。
＊
昨日見たあの明日は、今日もまた明日だった。
いったい、明日はやって来るのか。
また、今日も、昨日の明日が、
こうして石碑に刻まれ、埋葬されてゆくのだ。
＊
限りなく明日が、手の届かない、己が背骨の石碑に、貝殻骨に、
甲骨文字の墓碑銘を苦く無惨に刻んで――。

一つのソネット

［一つのソネット］

白い雲が動いていた。
窓に区切られた空は小さかった。
部屋の真中に寝転んだまま、
ぼうっと、ただ眺めていた・・・或る日曜の朝

今書き始めたばかりの小説の感想が、未来から届いた。
とても面白いと言う・・・
剥製になった彼女を見ては泣いている男の話だという。
まったく身に覚えのない、全然考えてもいない内容だった。

そこへ、背筋の伸びた女が入って来るなり、突然、「原稿はできましたか」、と
一方的に捲し立てるので、頭をなんとか整理して、そんな約束はありません、と、
ようやく言おうとしたところに、どいうわけか、爪の長い女が、
いつの間に上がりこんだのか、部屋にいて、「まだです」、と答えた。

すると、これもあるはずのない、丘の向こうの海の上から船の汽笛が鳴り響いて
リズミカルな謎の行進が段々段々とこっちへ向かって段々ダンダン段々ダンダン近づいて来る。

薔薇の想い出

　薔薇の想い出

未来が、予期もせずに、ある日、記憶の中で蘇ると、
樽の中の血を舐めた貧血の薔薇は、逆さまに、激しく垂れた。
かつて、アレ程冷酷に、鉄の味を教えた棘が、
その、か弱くも強かな薔薇の、ドクドク垂らす、

優雅な悲鳴のように
溜たたり落ちる、その血のインクで
寂しすぎた想い出を、一つ、また一つ、と、
白い意識の上に、黒々と、記しはじめる。

いつも闇夜に怯えた匂いも、
今や、モノクロームとなり果てた、乳の香りがする懐かしい思い出達も。
・・・ドキドキしたあの人の、

体内を流れるモノクロームもまた、今は甘く変わり、ズキズキと苦い味は、
別の物語を紡ぎ流れているのだろう。鉄の味を知る過去が、饒舌きわまる、
あの口を開くのを、そっと塞いで包んでくれるのはこの優しく黒い瘡蓋だけ。

【 理不尽な依頼 】

《さっそく用件に移ってくれ》「驚かんで聞いてくれ。君に、儂を守ってもらいたいのだ」
《殺し屋の俺に？命を守れというのか》　「これから、この屋敷に、儂が招待した8人の男女が
やってくる、その中に儂を狙っている者がいる。だが、それが誰なのか皆目わからない。そこで・・・」
《俺の出番というわけだな》「君に、その犯人を突き止めて、射殺してもらいたいのだ。期限は５日。
こんな面倒な依頼を引き受けてもらえるとは思っておらん。だが、出来るのは君しかいない。頼む。」
屋敷には、様々な男女が集まり始めた。医者、弁護士、政治家の各夫妻。女優、独身の大学教授、
依頼者が勝手に俺を詩人だと紹介したので、「どんな詩をお書きですの？」という面倒な質問と、
表面的で鼻持ちならないありがちな話題さえ無ければ、豪華なディナーの食卓は、素晴らしかった。

一同に混じりながら、それとなく、集まった面々を観察したが、ハッキリしたのは、全員が疑わしいという
ことだけだった。依頼人が体調が悪いと部屋に退いた、３日後の夕食のとき、とうとう事件は起きた。突然、
広大な屋敷が停電し、驚く間もなく夕食のグラスに混入された睡眠薬で皆、昏睡する。俺は、グラスに
口をつけて止め、暗闇でものを見る手立ても心得ていた。気づかれぬように、夜光塗料を全員の背中の急所に
擦ってもおいたのだ。俺は、その塗料が素早く部屋を出るのを追った。廊下でその塗料を狙って撃つ。犯人の
顔を見た依頼人が突然、「よくも、息子を」といってこちらに銃を向けた。こんな理不尽にも俺は慣れていた。

（※ ソネット）

笑 顔

モノクロの映画が、僕の方を、じっと観ていた。
僕の黒い瞳は、、薔薇色の少女の口元だけを観ていた。
こんなにも、楽しそうに、君は笑ってくれてたんだ。まだ、君の、
弾けるような笑顔がそこにあった。

無色な透明となった僕は、その笑顔が今あることに、撃たれた。
この映画館を出ると、僕等を襲う悲劇を、
まだ知らずに、笑い、泣き、そしてまた笑う君の、
だたそれだけの、このワンシーンを、永遠に、僕は、

この瞳に、焼き付けておきたい。
映画のラストシーンが近づく。僕の肩に寄り添った君を
離れた席から観ている、十年後の僕。たった、一度だけ許された、

このタイムスリップで、僕が選んだのは、ここだった。
君と初めてデートした一日。それは、この映画館を出た15分後に
君を失ったこの、・・・あの・・・一日。

【錆びた英雄】

———頭の中を、行き過ぎる葬列
———心は、苦悶の表情を隠した
———わたしは美のために死んだ
　　……沈黙は耳を喪失う

——金色にずっと燃えている虫は
——銀色の玉を胸にかかえたまま
——ピンと張りつめた言葉の上で
　　身動きをしない……

季節が、
　　これから
　　燃えようとしていた

だが、錆びついて、使えぬ鍵束が
抽斗の奥で重い躰を横たえたまま
来ない時を、じっと、待っている

邂 逅

ぼくの化石が、笑いながら尋ねる
もう春ですか、と
やさしい物音が辺りに満ちてきたから、と
そう尋ねた時、湖水で何かが跳ねた

漆黒の深い闇の底へ、光はすべて埋葬され、
１つの箱だけがいまここに掘り出された
きっと、中に深い絶望の入った、１つの深い箱が
風も遠くで声を秘そめる

ぼくの化石が微笑んで答える
パラケルススの箱ですよ、と
風は遠くで声を秘そめつづける

開け方が解らず蓋に刻まれた線文字をなぞった、その時
文字が光り、箱は無線LANに接続されて、突然蓋が開いた
ノクターンを奏でる箱の中で、《何か》が、号泣している

Ⅲ.

春／

めざめると

　あたまが

　　ひらがなだけになっていた

　このままでは

じょじょおがない

いやいや

　そんなことはない

　　〈はるのためいき〉

　ほら

＊

ひらがなで、あろうが／なかろうが

ここにある　はる

そう　ことりも　こいをうたう　はる

なのに

　　きみは、もう　いない

　　（はねになったきみ〉

　ほら

＊

はなのしたで／ねむると

　　もう「めざめなくていい」と

　　かたくなった／からだが／かたる

　だけど、せめて／うみが

もういちど／うみが／みたい

　　しかいに／もはや／いろは

　　いろは／もうないが

　　だけど／もういちど／みたい

　　〈あのおもいでのあおを〉

　――あおだったはるを

バサラ街カオス4番地

米ミズーリ州ホワイトマン空軍基地から、
闇の中を密かに4機のステルス爆撃機が飛び立った。同じ夜、人妻が出歩いているのは、基本、家にダンナがいないせいだ。

日本列島の地下でぶつかりあっている４枚のプレートは、
日常的な細動を頻発させはするが巨震はめったに起こさない。でも、圧力が臨界状態になると些細な地殻変動で破滅しかねない。その上では小中学生が最近なりたい職業は声優だっていうのに。

TVに出て、人前でしゃべるのが苦手なんです、
という政治家は流暢に異国の戦死者何万人より親しい人間ひとりの死が、重く遥かに悲しいなんて本音は隠してる。当然、インタビュアーの娘にそのオッパイすげえ、なんて口にするのも苦手なはずだ。芸人が先輩芸人の映画にケチをつけて炎上したことだって、憲法２１条ならぬ十七条憲法の精神を知らないと言って高笑いするだろう。

先進国はかつて考えられなかったリスクを抱えている。
原発、GMO（遺伝子組換食品）etc. リスクに直面したとき、叡智が試され、理性と節度が求められる。人類はどう行動するのか。女子高生だってかつて考えられなかった鬼高いケータイ料金を抱えている。

家出して心配させる癖に、
高床式住居を出て竪穴式住居にもどるなんて嫌だからね、と結構キッパリ長電話で駄々をこねる。だって、一匹のクールな縄文人をやめて、稲作サークルに入会した弥生人だもの、と。

現在最強の抗生物質、カルバペネムがもう効かない。
耐性菌の院内感染がすでに広がっている。抗生物質治療は全ての菌を殺せないので生き残った一部が耐性菌になる。我々は永劫、さらに対向する抗生物質を開発し続ける宿命だ。戦い敗れ、病気のとき病院に行くと危険だ、という時代が来るかも知れない。それは怖い。だが、絶対、タンスにぶつけた足の小指のが痛い。

そこになくてはならぬ物に、
冤罪の呪詛を吐くほど痛い。些細な地殻変動で崩壊するとしても。

サーカディアン・フラクタル

空といたい。
そう言って見上げた優しいおでこに
ギリリと違和感が粘着していて
不毛の鳥は翔けてゆけない！

「ヒューストン、応答せよ！」

空が痛い。
そう言って
不毛の鳥は翔けてゆけない！

結合したい言葉を探しに
定規で２cm 先の近未来にすら
不毛の鳥は翔けてゆけない！

　　年表にはＹの足跡

「生まれておいて死にますか？」
いつだって　Ｙ感覚！

Ｙ感覚！

いつだって、
いつだって、
いつだって、
・・・・・・
いつだって、
内因性のリズムを抱えた小さな宇宙が
走り続けている
いつだって、
他のリズムと外的同調を繰り返しながら
走り続けている

ヘトヘトにもならずに・・・

内因のリズムには、個体差があるだろう

ゼブラフィッシュだって、ニワトリだって、アルジャーノンだって、・・・
英雄だって、小心者だって、・・・

生物にとって、一番の同調因子は、光。そして温度だ。
希望と優しさ。
ある者は、餌に同調する者も、シキタリに同調するモノもいる。
生活と権威。

マングローブに住む昆虫よ
一斉に産卵する処女の珊瑚よ

きみにとって、
同調因子は一体何だ？
きみのＹ感覚の位相とは何だ？

内因性のリズムに恥じながら、
外因性のリズムに怯える
サーカディアンからの、
脱同調――。

ドコマデモハリメグラサレタ
同じ位相

デキハシナイノカ――

相似形に
嵌めこまれた
ぼくらには

相似形に
嵌めこまれた
構造の中で

眼の前に
拡がってゆくほど、
現実が　　部分が
複雑になる
ぼくらには

個体差はあるンだろ

職場に帰り、家庭に出勤するものもいるンだろ
学校が憩いで、家庭が戦地のものもいるンだろ
皆が、違う柄模様の絨毯を敷き詰めた部屋を往き来する
子供時代の苦悩と自己相似形の苦悩の欠片ばかりデスカ・・・
それとも　ずっと反復し続ける幸福のフラクタルばかりデスカ・・・

だが、

メガバースの片隅で、皆が同じようなフラクタル
相似形の２４時間を、単純反復するフラクタル

位相の中にある相似形のきみの
同調因子の
着信履歴を隠すな！

ボクラは巨大な詩の中でいまFontのように並びながら流れてる

一輪の日々

何んにも隠せない　快晴の或る日
昼でも夜でもない　街のなかを
わたしは、俯いて歩く
恐れられる　吠えない犬のように
そして
世界の綻びを拾い上げ
　何もない空を見上げる

機械仕掛の戦略を支持する群集が
時計の針を読みながら
皆んな　俯いて歩く
笑いながら　吹き過ぎる風を　躱すように
そして
持ち過ぎた物が溢れ
　忘れていた空を思い出す

嵐が雲を吹き飛ばした或る日
希望はどこへ、消えたのか？
彼女は、俯いて歩く
決して沸騰できない　海のように
そして
無口な女は首を伸ばし
　加速する空を見上げる

一見普通にしか見えない　全てを

呑み込む　意志は孤独だ

美しく光る夜に
死者の気持ちになることがある
わたしは、俯いて歩く
森へひとり帰る　狼のように
そして
毒にも薬にもならない
一度終わった過去の、
飛距離が足りない栄光の病巣に、
　空を見喪い、クラクラとしながら……
せめて
　君のための　一輪の
　　勇気で　ありたい

花々の流竄

蟻は汚染された土壌を
歩きながら、
花に出会った。
花は土壌から芽吹いた
笑顔のまま生まれた祈り。

手のひらに、
流れ落ちる
黒い涙が、
咳き込みながら
抜け落ちた束の間を
追憶する。

蟻は、土壌を歩きながら、
花は、傘のように雨に揺れて、
朝のうたを思い出した。

（今日も）

青空が産まれる。
瞳には映らない
名前も無い
祈りが

あれから

どしゃ降りのあれから
何年たったのか
酸性雨の小雨のなか いま
傘」を忘れた

全てを塗り潰す僕らが
あの日」を
帰り際にベンチの下に
頬を染めて

ポツリ。ポツリ。
芽吹いて
ポツリ。ポツリ。
ただ、願った

緩衝材の
プチプチを潰すように
繰り返す、

忘れられないロゴスの
頬を染めた
退屈な
人形だとしても

恥ずかしい今も
何度溶かされただろう

咲いていた君」を

水溜まりに反射した

日陰に出来た

残された傷の意味

古い曲が流れている。
詩人がそれを聞いていた。

♪

何の疑問もなくカラオケを唄える人は羨ましい
そう思いながら

♪

友人に連れられて入った、古びた カラオケ♪スナック
水割りを片手に、詩人は、客の一人が唄うテレサ・テンを聞いた。
『つぐない』
だった。

♪ ～愛をつぐなえば／別離れになるから～

〈 壁の傷も残したまま置いてゆくわ 〉

詩人の耳がそこで止まる。

「壁の傷」？・・・
それは　何の傷だろう？

何によってついた傷だと思う、と友人に尋く。
　「痴話げんかの時についたキズだろう、物を投げつけた時についたとかの」
そうかな、・・・

詩人は納得できなかった。
敢えて残していった傷が、そんなものだろうか、・・・と。

嫌いで出てゆくのではない、
去ってゆくけど、でも愛している
そう伝える為の　この〈傷〉が・・・・。

＊　＊　＊

酒が何度が注ぎ変わると、曲も野口五郎に変わった。
マニアックな曲
タイトルは、『舞』　（舞―女の名前らしい）

♪　～そんな気がして、ドアを開けたら／残り香だけがぼくを待ってた～

〈 壁で揺れてた似顔絵も無い 〉

詩人の耳がそこで止まった。

壁に似顔絵を止めていた、
そのピンの〈痕〉、・・・！

その傷を見る度に、
自分が描いた対象がいたことを
描いた時の気持ちの痕を
思い出す

それをどこかで、女はずっと持っている

そうなんだね、

　と一、　心もわかる。

ある詩人が込めた密かな回答は
　もう一人の詩人の耳に いま 確かに届いた。

♪

古い曲が流れている。
詩人がそれを聞いていた。

２つの一瞬

久しぶりに水族館へ行きましょうよ。
そう彼女から電話があった。
十年以上も会ってなかったのに。

新宿の土曜日は待ち合わせには不向きだけど。
そう言っていたとおりの人混みの中、
約束の時間が少し過ぎ時計は午後になった

必ず行くわ。
― 遅れている彼女がまだ現れないのか
― どれが彼女だかわからずにいるのか
原因がしぼられていく暇を与えぬまま
多すぎる人並みは、まるで
水族館の魚のようにめまぐるしく流れていく

おひさしぶりね。
後ろからふいに肩をたたかれ、
振り返ると、まるで当然のように
明るく笑う彼女が立っていた

まだ時間あるわね。
懐かしい喫茶店はあの頃のままで
あの頃のように懐かしく彼女と向かい合い
懐かしいあの頃の話が、花を咲かせる

よく覚えているのね？
あの頃も店のあそこに美しい華があったね
覚えているかい？
　「あっ、今も、綺麗な華があそこにある」
変わらないな、すべて。
あの頃と、・・君、・・・。

その視線と
その間が

一瞬で、
彼女を傷つけていた。

そうよね、わたしはあの頃のままじゃないわ。
わずかな
取り返しのつかない凶器の（一瞬）が 、
――じつは、
男が、自分の愛もあの頃のままだと、告げようとした一瞬だった。

愛の数値

問題：以下の「詩」を読んで、下記の設問に答えよ。

熱いのが好きなわたしに 彼はいつもぬるいコーヒーを出す、
そう友達に言ったの、今日。

　　この間気づいたんだけど、愛って数字で測れるんだよ。知ってた？

ねえ　わたしのこと愛してる？

　　ん、あ、ああ。　もちろんさ。

どのくらい？

　　え？　う、うーんと、・・・　　・・・・

ねえ、わたしのこと　どのくらい愛してるの？

　　ぼくってさ、ほら普段平均時速40km/hの男だろ、だから
　　ともだちを乗せると決まって、安全運転いいね、と皮肉でさ
　　後ろからいつも煽られるけど、絶対に変えない 超〈まいぺいす〉
　　なこと
　　君はみんな知ってるよね？

（不満顔に不安な目つきが）だから何なの・・？
わたしのこと愛してないの？

　　実はね・・・、　気づいたんだよ、この間。

君に逢いに車で走ってくるときにさ
絶対に40km/hのはずなんだよ僕は。だから40km/hだろうと思って見たらさ
速度計がね　・・・・
METERが・・・（①　　）km/h 出てたんだ！
自分でオオッって、驚いた！

そうか、おれは、君を愛してるんだなァって
そうはっきりと 気づいたよ

君とずっといたい・・・

この気持ちが、
ぼくのMETER 振りきるくらい　君が大好きだよ。

設問１．本文中の（①　　）に当てはまる正しい数字を答えよ。

設問２．この後もし、彼女の言葉が続くとしたら適切なものはどれか？

A.　だったら、キャラメルコーン買ってきて。
B.　私も大好き。今日友達に変なこといってゴメン。
C.　嘘つき。もう知らない。
D.　バカ。・・・事故に遭ったらどうするのよ。本当に私のこと考えてる？
E.　A以外の気持ち全てを含んだ沈黙のまま、甘える。

-----※-------※--------※--------

（註）
第一文から最終文まで
全体で１篇の詩です。・・・念のため。

律動

愛すれば愛するほど

君が苦しそうで・・・

なのに ぼくは

止めることが出來ない

突き刺したぼくを

包み込むきみの　温もりに甘えて

　このまま
君に 吸い込まれながら

　このまま

果てしなく愛に耽りたい

浅く摸（さぐ）る　やさしさは

やがて
　燃え上がる軌道の中を
藻掻きながら
浅く浅く
浅く浅く浅く
深く深く浅く強く深く
深く深く深く深く深く深く深く
深く深く浅く
浅く浅く深く深く浅く深く深く
浅く深く深く浅く
深く深く浅く深く深く浅く
浅く浅く深く強く深く深く浅く深く深く奥奥
速く速く速く速く速く速く速く速く速く速奥
速く速く速く速く速く速く速く速く速く速奥
浅く浅く深く深く深く浅く深く深く奥奥
深く深く浅く深く深く浅く
浅く浅く深く深く浅く深く深く
浅く浅く浅く
浅く浅く深く深く浅く深く深く
浅く深く深く浅く
深く深く浅く深く深く浅く
浅く浅く深く強く深く深く浅く深く深く奥奥

浅く浅く深く強く深く深く浅く深く深く奥奥
速く速く深く強く深く深くく速く速く速奥

速く速く速く速く速く速く速く速く
速く速く速く速く

浅く浅く
浅く浅く深く深く浅く深く深く
浅く深く深く浅く
深く深く浅く深く深く浅く
浅く浅く深く強く深く深く浅く深く深く奥奥

なんども何度も　繰返すぼくに
震えながらしがみついて
共犯者になったきみは
のしかかるぼくに仰け反り
ぼくの激しさに喘ぐ

……
速く速く速く速く
速く速く速く速く速く速く速く奥
浅く浅く深く強く深く深く浅く深く深奥

浅く浅く深く強く深く深く浅く深く深く奥奥
速く速く深く強く深く深くく速く速く速奥悦悦

宿命は突如おとずれ

銃弾を撃ち尽くして倒れるぼく
打ちよせた波に意識を失くすきみ

……

そして

生まれ変わり
　聖人となったぼくを探さずに

ぐったりしたぼくの骸（むくろ）を
　君はまた頬ばる

瞳

夫と2人で　ひさしぶりの動物園
夫は動物を見る
私は夫を見る

子ウサギを見る夫の目が温かく緩む
その目をわたしは見た

クジャクを見る夫の目がその眩さに大きく深くなるのも
わたしは見ていた

サル達に挨拶されて夫の目が 明るく照れを含んで笑う
その目をわたしは見た

猛獣の檻に近づいた時、突然トラが吠えかかると

夫の目が
ねずみのように萎縮して 哀しみとも怒りともつかぬ瞳をトラへ向ける
その目をわたしは ・・・ずっと 見てきた

いつもわたしを見るときと寸分違わぬその瞳を

ソクラテスのアイロニー

毎日、何十個もの隕石が地球に向かって降ってくる。ほんの僅か1ｃｍ足らずの小さな星屑が、地球に衝突する前に大気中で燃え尽きるとき、それが恋人たちの見上げる夜空をロマンチックに駆けてゆく流れ星になる。

そしてその数年後、結婚し、ベランダでタバコを喫いながら空を見上げ、毎日、何十個も降ってくる女房の小言が、どうかおさまるようにと、密かに願う時にもやはり、星は流れている筈だ、涙と共に。

だが絶対に、「いっそ楽にしてくれ」などと星に祈らないでほしい。その小さな塊の直径が 100mになるだけで、その願いは十分すぎるほど叶ってしまうからだ。それも恐ろしく驚異的な破壊力で。

1908年6月30日 朝7時のことだった。人類史上最大の隕石衝突、ツングースカ大爆発が、中央シベリアの上空を実際に襲ったのは。太陽の如き火球が炸裂し、強烈な火柱と真っ黒なキノコ雲が、その時、遥か広大な森林をあっという間に焼き払ったのだ。

もし同じ隕石が東京に飛来したなら、たかだか直径100mの隕石が実は、広島型原爆1000個分に匹敵することや、関東平野を全滅させてしまったニュースも聞かぬまま、そこに居る人間達はみな熱風によって燃えるよりも先に蒸発してしまう。

ごく些細なものが、それ程凄まじい破壊力を持っている。

僅かな妻の一言もまた、DV大爆発の火柱といい、部屋一面の壊滅といい、一挙にダンナを蒸発させることといい、凄まじい破壊力を恐ろしいほどに秘めていたりする。

発する時は僅かな破片にすぎずとも、飛来する衝撃波は凄まじいのだ。 この規模の隕石は、悲しいかないつ会社をクビになるかわからないのに似て、いつなん時落ちてくるのかわからないのだという。数百年に一度らしいが、観測したくても小さくて地球からは接近が見えないのだ。

そして、‥‥‥それが見えた時はもう遅い。

隕石ならぬ漱石が倫敦から日本へ戻ったのは明治36年（1903年）のこと。帝大のほかに一高でも教鞭を執ったが、生徒の中にあの藤村操がいた。授業中に強く叱責した数日後、このエリート一高生は遺書『巌頭之感』を立木に刻んで、不可解にも、華厳の滝に身を投げた。動機は２つの失恋だったのかも知れなかったし、本当の所はわから

ない。

しかし、皮肉なタイミングが漱石に衝撃を与える。翌月から極度にノイローゼを悪化させ、家族とは別居、離婚の危機にまで発展した。そして、後々まで後味の悪さを引き摺ったであろう。漱石は愛情の、藤村操は自尊心の〈不可解〉に苦しんだ。小言とは不満な相手への形を変えた愛である。自殺とは時に生き恥を背負つづけることに耐えられぬ殺せないプライドの末路である。事件の社会的な波及力も大きかった。奇妙に流行して後追い185名が投身を図り、40名が遂げている。

小さな事柄から、巨大な波紋が引き起されるのは全く不可解である。ただ、もうちょっと跳ぶのを待ってさえいれば、この年、ライト兄弟がはじめて空を飛んだのを知ることができただろう。

大昔。「嗚呼、プテラノドンのように大空を飛びたいなぁ」とステゴサウルスが嘆じることもなければ、夕陽を見て涙するトリケラトプスも居ず、雌のティラノサウルスが「海が見たいの」とわがままを言うことも皆無だった。いきなり噛み付くことはあっただろうが。

かつての地球の王に知性はなかった。寝不足で疲れたイグアノドンが栄養ドリンクを飲んで、なんだ、これはスティック７本分の糖分で血糖値が上って元気が出た気がするだけじゃないのか、と考えたりはしなかった。だが、その分、適応能力がおそろしく発達していた。だから2億年近くもこの地上に生きたのだ。たぶんもっと、あの６千５００万年前ユカタン半島を直撃した半径10ｋｍにもなる広島型原爆の10億倍という、M(マグニチュード)13の地震と高さ1ｋｍの津波を引き起こした史上最大の隕石が、外から降ってさえこなければ。

一方、知性的なはずの人類は、わずか10万年で、自分たち一人ひとりを隕石にしてしまった。わずかなボタン操作で大勢を巻き添えにしてしまう危険を誰もが備えてしまったからである。

ひと昔前であれば、馬を駆るなら一馬力、四頭立て馬車でも四馬力のコントロールで済んでいた。それがいまや500人の乗客を乗せたジェット旅客機を２名で飛ばし、1500人の乗客を乗せた新幹線を1人で走らせる時代となった。ボタンの押し間違い一つで、大惨事が引き起こされる可能性が周囲にあふれている。

有機リン系の殺虫剤マラチオンは、ダニ・ハエ・アブラムシなどの駆除に使われる。はじめて日本に入ったとき、ヘリで畑に散布されたが、地域の子供たちに平衡感覚の異常が認められたのは７年経ってからだった。マラチオンは、空気や太陽光で、マラオキソンという物質に変化して、毒性が10倍から50倍に増幅する。

精子数を減少させる危惧もあるマラチオンだが、ポスト・ハーベスト農薬として収穫後の作物に散布され、少子化を騒ぐ日本への輸入食材の多くに含まれている。

食のチャイナシンドロームに、「疑わしきは食さず」と、自己防衛を貫けば、コンビニの『タラコおにぎり』の海苔とタラコが食べられない。スタミナGETのうなぎからマラカイトグリーンもGET。成長ホルモンと抗生物質を濫用した異常成長のブロイラー鶏肉の唐揚。冷凍しても死滅しない大腸菌が、農薬や添加物とともに残留する冷凍食品等など。

安ければ毒でもいいのは、買い手より売り手側の最大多数の最大幸福。微量は大きな被害にならないという言葉を、空高く積み重ねる悪魔の見えざる手。

例えば、一枚のうすい「紙をハサミで50回切って重ねたら」その厚さはどのくらいになるか、というパズルがある。

タテヨコ 1m 四方の紙で、厚さを0.1mmに設定してみよう。

２回切ると、50cm四方が４枚になり、

重ねると、0.1mm ×4　で、厚さは 0.4mm

さらに、

もう2回切ると、25cm四方が16枚になり、

重ねると、0.1mm ×16　で、厚さは 1.6mm

どうやら、

0.1mm ×（2の[切った回数]乗）になっている。

すると、

0.1mm ×（２の50乗）が答え＝1.13億kmの厚さとなる。

0.1mmという極薄の紙一枚が、地球から太陽までの距離（1.5億km）に迫れてしまう。

ただ、こんなに切れるハサミがどこにあるのかプラグマティックな疑問もあるけれど。

日本料理がユネスコの無形文化遺産に登録された。農水省の推計では、いまや世界に５万軒以上の和食レストランがあるという。

早速、ツアーに出かけよう。ロンドンのトラファルガー広場に到着して出会うのは和食と称するB級中華。ピカデリー・サーカスを歩いて、靴を脱がない炬燵式のテーブルに着くと、運ばれるのは韓流激辛の親子丼。

やはりイギリスは口に合わずと、美食の街パリを訪ねてみれば、そこにはチョコのように甘い刺し身がトレビアン。バスティーユの歓楽街で供される、生臭ドス黒まぐろ

に舌が悶絶する。

魚介料理が得意なイタリアで口直しだと、出会ったイタリア美人おすすめの懐かしいオニギリを頬張れば、にぎられてるのは、酸っぱい酢飯。

ふざけやがってとシェフを呼び、わけを質せば都市だけ栄え、見捨てられた田舎で餓死を横目に雑草を食い生き延びてきた、国も宗教も捨てた悲しき味覚音痴の中国人コック。ここにも食のシンドローム。無形文化遺産のふざけたパロディの繁殖がクール。

太陽系の最高峰、火星にあるオリンポス山と山頂のカルデラ湖 オリンポス湖が、ユネスコ世界遺産に登録されるのはいつだろう。片道180日、宇宙線被曝量の許容範囲1000ミリシーベルトの半分以上を超えるから、観光は片道切符になるけれど。やがて太陽にやられる地球から逃がれるため、むこうで芋虫と毛虫を食べて暮らす火星移住計画は、移住者の第一次審査に日本人10名が合格したということだ。

いま組織論では、「パスゴール理論」なるものが重視されているらしい。　有能なリーダーは道筋を示して途中の障害を減らしながらメンバー・集団の円滑な目標達成を促すことが要務だというのだ。

でも大丈夫だろうか。邪なゴールしか描かない年長者と、少しは苦労した方がいいような年少者の集まりばかりだとは言い切れないが、それでも二律背反の迷妄の陰にいつも、潜りこんでいるやっかいな真理というやつを、根気強く連れ出す方法を教えた真の知者に皮肉な最期を選ばせがちな癖がいまも人類にないとも言い切れない、そこで生きるぼくたちの未来は。

太陽が赤色巨星となり、地球も火星も呑まれるか焼かれるかする数十億年後の未来までには、方舟に乗って皆で太陽系を出なくてはいけないというのに。

今はまだ、クモの糸を取り合うゲームにかまけていても。

時の肖像

時が降りしきっていた

黄昏の公園にはベンチが一つあり
そこにずっと座る
一人の老人の頭の上にも
白く降りつもっていた

どこからか飛んできた蛍が
燃え尽きて その膝で眠ったときにも
　ずっと・・・・・・
それは降りつもっていた

その胸の蛹から孵った蝶が、
静かに羽を扇ぐいまも
　ずっと・・・・・・
それは降りつもっていた

PATA―PA―TA―TATA、PATA―TA・・・PA・・
蝶よ
　その羽搏きで
　　たのむから
　　詩など 詠わないでくれ
パタパタと
　　心に
　　風を起こさないでくれ

PATA―TTTTTTTTT・・・

PAPAPPPPPP・・・
若き日
 本当の愉しみは知らずに過ぎ
PATA―PA―TA―
 ―TA・・・PA・・
消え残る月をはるかな
空に見つめて
われは
今　ここにいる

足下には
　　まだ
　横たわり
　　枯れぬままの　花束

 耳には
　　まだ
　内奥（なか）から響く・・・
　　真紅い運河の　叫び

おそらく、そこには

　己れから本当の愉しみを
　　奪われ続けた者が座っていた

いや　おそらく、そこには

　己れから本当の歓びを
　　奪い続けてきた者が座っている

※

時が降りしきっていた

黄昏の公園にはベンチが一つあり
 そこにずっと、
一人の老人が座っていた

消え残る月を見つめて
胸に蝶が羽搏く
独りの老人が座り続ける
 時が降りしきる公園が
そこにある

※

公園の近くて遠い場所に――
沢山ある角ばった街並みがある。

雑踏が倦んざりする程散乱した道を
抜け出せぬ若い真昼が
ひとり、歩いている街並みがある。

幾千幾万の窓からハミ出して
飛来し　炸裂している　雑踏が
膨張と縮小を繰り返し
鼓動しつづける
熱く冷たい
街並みがある

※

街並みの遠くて近い場所には、ある。――
飼い主は自転車に跨がり
紐を握りしめた横で
無理やり連れだされた老犬が、
舌を垂らしながら
歩く日がある

飼い主だけ傘を差した雨の中を
若い犬が、駆けるように
歩く日がある

毎日が流れ去るその道の
横には、ある。

廃品の山のてっぺんで
空を見上げて死んでいる扇風機が。

風に、襟を立てて過ぎる横顔は
泣きもしないで歩き過ぎ
車の来ない道の前で 何も疑わず
信号機に命じられたまま歩を止める
町が。ある。

図書館の奥に瞑る
全集のような人びとの
暮らしとともに。

ある自己紹介

新入社員になったり、転勤したりすると
職場でアフターファイブの歓迎会があったりする
そこで独特の語彙と文法を駆使した自己紹介ができることも
社会人の大事なスキルのひとつである
詩人などはバイリンガルでないとやっていけない

そこでもし、詩人が
　　皆さん、はじめまして、
　　わたしは、実は
　　＜ことば＞です
　　みなさんも、じつは
　　＜ことば＞でしょう？

　　それ以外に
　　本当の自分が在るでしょうか？

　　お互いに、見えている姿や振る舞いが
　　本当の'わたし'でも'あなた'でも
　　ありません

　　わたしは、本当は
　　　　＜わたしのことば＞であり、
　　あなたは、
　　　　＜あなたのことば＞である
　　はずです。
　　ところが会社では皆、
　　　　＜社会のことば＞と化して
すがたを消すのです　そしていまも　こうして、

どこか空々しくどこか安心しながら過ごしていますが、

本当は、わたしは、＜わたしのことば＞ですから
大変申し上げ難いのですが
実を申しますと
いま、こうやって目の前で話していながら
いま、 わたしは、
本当は、ここにはいないのです。
それがわたしです
それでは、
皆さん、凍りつかずに　今後とも、どうぞよろしく

リノケロスの肉球

いかにもその渡世を彷彿とさせる
全身傷だらけで　目の据わった
一匹の猫が　固く舗装された道を歩いてくる
踏みしめる肉球　心は動かない
ただ黒く固い舗道のザラつく感触のみ
彼は自分の中に迷い込んだりしない

ふと　猫は見慣れぬ物体を　自らの導線の先に見つけた
いかにもその渡世を彷彿とさせる　用心深い身体の動きを伴いながら
己しか信じない二つの眸が　その物体へと真直ぐ近づいていく
一撃の距離で立止まると　　謎の相手の呼吸を伺う
彼は誰かの中に迷い込んだりしない

そこから　彼は物体へと　頭だけを徐々に近づけながら
そおおっ　と、　鼻を寄せた
際立つ程ハードボイルドなその猫の
その痩（こ）けた顔　　その鋭い目
そして　その・・・油断のない鼻の
すぐ前に・・・！

・・・・・・、・・・、
・・・、

松毬がひとつ
落ちていた

・・・・・・・・・・・・・・、
・・・・・・・・・・・。

まるで、

何事もなかったように
すぐに、もう　彼は
ふたたび歩きはじめた

もう
彼にあるのは
固い舗道のザラつく感触のみ

（註：題名は、＝＜犀（の角）のように歩む＞を含意）

Mirage

＊

レトリックの瓦礫が密集する街を頬を赤らめて通り過ぎてゆく足取りが虚しい。整然さを嫌った歪んだ街路ばかりの、あざとく惑わすような模造芸術の佇まい。支配電波が強烈な悪名高いＢ地区では入力辞書の変換も大してあてにならない。正統が異端となる街。俺は途を急いだ。ここには……音がない

その街の隅に、独りの男がいて、俺は彼に遭いたくていま、この途を歩いているのだ踏み込めば、すぐに出たくなるような道ばかりを、蒼醒めつつ掻き分けながら進んだ。辿り着いた時にはひと足遅く、そこに目的の男の姿はなく、街を捨て旅立った後だった。俺は仕方なくこの地区を出て男の後を追い旅に出た。

空が白くなり始め、明るさの萌すＭ区域に達した辺りに、一匹の山羊がいて、俺は足早にそこを通りすぎようと、歩を速めた。その俺の背中に、とつぜん山羊が鳴いた。それは、俺の心を捕らえて離さぬ音だった。その声には、あらゆる人と人生の哀しみが篭っていた。 俺は泣いた。男は山羊になっていた。魂と叡智の宿った瞳。その声は、……まさしく謌だった。

＊　＊　＊

旱魃の中を征く　破竹の水黽が　ジャリジャリする砂の上を滑っていた。無限に吐き散らされた吐瀉物のような熱砂の上を　ただ朦朧と　雑巾がけでもするように。否否　否　熱風に煽られて其の身で雑巾がけされているように、が正確なんだ。彼岸も、此岸も、どんな位相も、多分、彼にはどうだっていいのだから　ただ降り下ろされる金槌だけを埴輪か土偶のように彼は歓迎する。胸の琴線に叩き込まれるような　非在の修羅の謌を。

何も知らぬまま気づくと水黽は、迷い込んでしまっていた。靄となって禁酒法下の街の中へ。住人たち全員がアル中の街路では間の手が飛び交う年代物のハイヤーム製腕時

計サーキーも、ポエム社製の最新ウォッチも区別がつかず空に何か渦巻いて沈黙しない限り、普段は揉みしだくような批評が取交わされている。 コメントはむにゅむにゅし、時に鋭そうなペロスチャスチャスチャという鈍い音が響く。

　雨を待ちながら水黽は、カラカラの躰を引きずって何処へ行ったろう。時が過ぎ、やがて誰もが忘れてしまった頃の或る日、貴方の手元に届くのは――ポストを開けると、中で鷲が旋回し、置かれている切手の無い一通の手紙。クラッシクで滑稽な現代詩で書かれたヘルツォーゲンベルクからの手紙である。

　　＊　＊　＊　＊　＊

　　歩きながら、手紙を開いてみると、音が流れ出た。リリリリ、…ククク…、リリリ、ククク…リリリ、ル～ル、ル～ル、……。 滔々と流れ続ける、Bydloの旋律。白く豊かな砂利を、さっきから嫌になるほど踏みしめている。道は、――もう骨を露わにし、とろみながら、　・・・岸辺に　・・・風に・・・　音色が舞い落ちる先から、まろやかに崩れてゆく……。その果てしなく甘く溶け、熟れ爛れて荒涼となった断崖に独り佇む　あなたの左に、河は、乳の波涛を湛えて飛沫く。救いは、ただ　肌のようなぬくもりの白さ。漂う砂姫たちは　「けれど、妹ではないのよ」　そう耳元で微笑んで消え、蠢く靄を纏うあなたにひろがる視界。すると、眼の前に画然と亀裂が煌めき、空の裂け目からは純金の砂利が溢（こぼ）れ出す……。だが、岸辺のアナタは、もうそこにいない。

ロースト・サマー

熱中症の蜂が
花びらに躓く
ちょうど昼寝時
樹陰のない夏の蜂が　躓いた
まるで羽の折れた言葉のように
何でもありの蜜の中へ
フラフラに　脱水した蜂は　真っ逆さまに
琥珀の決意とともに
ポトリと
優しく
笑うように

風の樹陰（こかげ）

＊

白いシーツが晴々とはためく青い午後
大きな風にのって君の嬉しそうな声が疾走る
思い切り抱きしめればまるでお化けのようなカタチ
くすぐったいと笑う君をすっぽりくるんだその存在を
ぎゅっと力を込めて確かめた時、
洗いたての香りの中で感じた不安も、確かめていた

＊

細い糸を繭のように紡ぐ毎日
速い川に落ちて繭は死んだように疾流る
気がつけばまるで振り乱した髪の毛のような足跡
すっぽりとくるまれた存在は一瞬の風に笑いたくて
ぎゅっと力を込めた拳を見つめながら、
洗いたての香りの中で感じる幸福を、確かめている

「詩集」

彼女は、毎日散歩することにしていた
おもいがけなく、風の強く吹いたその日
坂道を登り切ったところで
風に語りかけられた樹のように
彼女はざわめいた
そこで傷ついて死んだ小鳥の姿を
見られたからという理由以上に。

「なにか落としましたよ
　これです。小さな詩集です。
　貴女の詩集ですよ。　」

「え、？
　何ですか、それ？
「どうして、見えるの？
「どうして、在るの？
　『わたしの書いた詩集』・・・、が・・・。」

「すみません、誰にも見せない詩集でしたね
　そっと大切にしまっておいて
　そっと密かに見かえすような
　皆んな　誰もが持っている。だけど、
　あなただけが持っている　」

どうして？どうして・・・？
見えるのですか。
一体、貴方は何者ですか？

見えるのです。
夜、見つめている月のように
　降り立つこともできず、
　近づくこともできぬまま、
ただ遠ざかるだけの
月が、それでも

貴女を見ているように
　私には、
見えるのです。
貴女をいまは
　包みこんだまま、
見ているのです　そして、
こうして、
詩集を返しに来たのです。

でも、
せっかくですけど、わたし、
もう詩を書いてないのです。
あの日から・・・。

「一年前の、
そう、この日でしたね」
貴女がここを通った日、
わたしは見ていたのです。
ここで、
これを、この、『詩集』を、貴女が落として征かれたのを。
だからまた、貴女に逢いにやって来た
こうやって今、
貴女の詩集を届けるために。

「私の詩が見える貴方。
　不思議な方。
　いったい、
　どなた？」

わたしに貴女の詩が見える理由（わけ）
それは、
わたし自身が・・・、
わたしの全身が・・・＜詩＞
だからです。

・・・・・。

男は名を残して去った。
男の名は―― 春。

薄紅の炎

聞こえるだろうか？　一枚の、

絵画が

まるで、狂喜の

舞踏会　そして　夜のしじま

戻りゆく

描くように　描くように

微笑みを浮かべながら

ひらひらひらひらひらひらひらひらひらひら

宙を、
抽象具象に　踊り狂って　舞う

呼吸を殺害し、

地面に転がった

屍の、　花・・・花・・・花・・・花・・・
花・・・花・・・花・・・花・・・花・・・花・・・花・・・花・・・
花・・・花・・・花・・・花・・・花・・・花・・・花・・・花・・・
花花花花花 花花花花花 花花花花花
花花 花花花花花 花花花花 花花
花花花花花花花 花花花花
花花花 花花花花花花花 花花花花花
花花花花花花花花花花花花花 花花花花花花花・・・・・・

花花花花 花花花花花 花花花花
花花花 花花花花花花花花 花花花花 花花花花花
花 花花花花花花花花 花花花花花 花花花花花 花花花花花
花花花花 花花花花花 花花花 花花花花花花花 花花花花花 花花花花

花花花花花花花花花花花花花花花花花花花花・・・・・・
額縁からハミ出し
飛び出し
　て
　　来る

生まれ落ち吹き荒れた

美の、

呼吸（いき）の、

薫り、を、
掻き乱す
絵筆の

調べ、の、

薄紅に
　　咲き誇り散った
　炎の歴史を

風は、

どこへ伝えるのだろう

哀しみの中で、

確かに生きた　という

この証を

ボロボロ

局所的に覚醒がくり返されるボロボロ

愛されたがりの女が
計算したがって聞かない
塗り潰した美の奥底
には、それでも
折詰にされお土産になった溜息が
泡立っている

残虐は
過去と未来
との境界を
袋とじしたまま、

時折、突き破る汽笛は誰も
見たことのない処女のように遥か
水平線の彼方へ　どこまでも
逃げ　て　ゆく
ようだ

　／青白い地球の上を・・・

「たとえ、千年の刻のむこう側まで追いつづけても

　廻りつづけるしかない」

知っていて拒否した世界の

重さ。

 枠の中で、
 十秒が永遠のときが流れる

忘れ去るための
儀式に
ひとは耽る
　　老ける
旅人は語る
　　騙る

永遠の三か月を
枠の中の旅人が
嗚咽する

プロダクト。

　　ーー誰もが見つめる、誰も見ていない残酷が
汽笛のように木霊したとき

右の耳が聴いたのか、
 左の耳が聴いたのか、
　　ーー恐らくは誰も、わからない。

何の変哲もない孤独が、寂しがり屋のマネキンと共に乗った
停車し続ける列車。
　行き先の印字が掻き消えて見えない
皺苦茶の切符。ただそれだけを握りしめたボロボロ

『　聴こえない森　』

閉じ込められて３日目の朝
ここは、冷蔵庫３丁目
消えた空を想って泣く。
反応したセンサーが人工的な光でありありと
照らし出す……
緑色に引き裂かれた傷跡
ココを出ればたちまち膿んでしまうはずの傷跡

まざまざと
自分でそれを
見つけ出しておきながら、それでも尚
探し続けるフリをした

見えたままの盲目となって
さ迷い続ける毎日。

或る日、
鳥肌の立った肉塊が、目の前の味噌を憎む
恐ろしいのはレタスの髪型
それを、やたらと褒めちぎり
ネットリと見つめるマヨネーズのしろいうなじ
初体験の果物ナイフに怯えた不機嫌なチーズの体臭
ひんやりと暗く
静かで賑やかな・・・
この真四角な思想

ガラ・コンサート

信号が、―……
「白」になり
露わな校長先生の群れが
一斉に飛んでイク
幕の中は
勿論、
膜のなかにすら
　もう

　「０」すらも　――……、

居られはしない
 と、いうのに。
いまや　全ての　存在
が
 シグナルと化した
 の、だから」

夜/昼の記号が
灰色の虹に捩れ
クモの糸を撚り合わす

指先が
一斉に掴む
 公園の
砂場の中に
仕舞われたｋUSoの数ほどの
隠喩
いんユ
インゆ
 引喩ばかりの
　　街が
冷えたゲーテ骨を覆い隠すように
眼を射る
真昼の――……、
内部で

荒れ果てた
木枯らしの諷喩の
路地を曲がれば
 そこに
　誰かの心

 陽だまりを買い占めた太郎冠者は視た。
 直喩が染みるような朝の終りに,
フォルティッシモで,
アレグロな,

冬を夢見た蝉の死骸を

感触を失くした定型句のように無恥な
靴底の裏に――…

NuBaTaMa

※ この詩は五七五ではなく、二四六音での変則定型詩の試み①
（「っ」「ゃゅょ」はノーカウント。「ー」はカウント）

雨を知らぬ　砂漠に
降り続いた
慟哭

流れ落ちぬ　孤独の
癒えはしない　灰（くろ）の影が
そっと
静かに　微笑む

笑う度に
わたしの

唇　には　悲しみ

ときには　いえ、
　たまには
　　憎しみ

言えはしない
灰（しろ）に削げた
この
すり減った　微笑み

でも、
もう　見つめないで

　一秒一秒
裁断する みたいに　思える

深く痛む　瞬間

ふと気づくと

ふと、気づくと
深夜の　猫のように
ふらりと　消え去った
あの日の
温もった　輪郭

やがて寒く　虚しい
白い床と　テーブル
四角い　音のなさに
叫び出して　駈け出し
歪んでいった　足跡

硬い程に　緻密に
砂を噛んだ　裸足に
踏み締めてた
朝の底で
　空を抱いた
そのとき
そのとき、
ポタリ落ちた
雨のような　面影

※ この詩は五七五ではなく、二四六音での変則定型詩の試み②
（「っ」「ゃゅょ」はノーカウント。「ー」はカウント）

METAMORPHOSEN

　何気なく剥くと、秋が出てくる。暗い場所に捨てられた石のように抱き合ったまま微睡むアリバイの無い〈真実と私〉。が、突然光を浴びた性器の様に、居たたまれぬほど高鳴ったまま眠っている。

＊

　画家のO君から手紙が来て、ぼくの正面に窓があった。描かれた秋のノオトは方程式の落ち着き。汗臭い人間たちが寄り添って来る無関係な午後の流れは、波を畝らせ、船をいっこうに辿り着かせぬままに。路上で、たった今轢死した猫が、立ち上がり鮮やかに駆け抜けるのを、佇んで観測しているそのぼくの…正面に、窓があった。

＊

　Ｓが堕ちて降るのを、眼の前でＫは見た。深々とした空間は下に長い。続々と生れ落ち、底へ底へ埋められてゆく……、垂れ堕ちた夢の一切が四歳の孤児の手のように夥しく芽吹いて、流れてきたオフィーリアの白骨に乳房を彫り上げる。咥えた乳首からアリアドネの糸を吸出そうとして。

＊

　エアロ・バイクの上に跨がって駆け抜ける日々が、いつも曖昧であやふやなまま過ぎてゆく。脱け殻になった記号が置き去りにされた景色は、ほどよく暖房の効いた場所に寝そべったまま、

じっと、バスが来るのを待っていた。風に吹かれもせずに。／ある日、雨の降りしきる深夜、そっと抜け出して、濡れたアスファルトを踏みしめ置き去りにした景色は、もうドア・ポストを開けても二度と目にすることは無いけれど、ふと思い出すのだ。あの時のように、風に吹かれたときに。

＊

　ひどい雨の中、つめたく青ざめた顔が、路地の片隅で、歩き疲れて飢えた心と、ぼんやりと一緒に過ごしていた。窓の傍では、白い月がいつも流し目でこっちを見る癖に絶対、眼を合わそうとはしなかった。「ああ、そうだな」、もうずいぶん前になる。本を速くしか読めなかった男が自殺したのは。埋葬は、至ってシンプルなものさ。その時、彼女を二列目の席に座らせたのは、テクストを一行ずつ正確に読む、おそろしく几帳面男だった。知ってるだろ？ああ、そうだ。長く生きたけれど、結局、愛読書を全巻通読しないままこの世を去ったよ。ほんの一瞬、幾重にも光景は過ったろうな。心も顔も別居していたんだ。自我というシュークリームの中で。

数え切れぬ孤独

数え切れぬ孤独

＜孤独＞がネット・オークションに出ていた。

存外たくさん出ていた

だから　少し驚いた

でも、

　街に出ればすぐ手に入るだろうに……　そう思った

　電車だって孤独のスシ詰め状態だ……　そうも思った

でも、なのに、

＜孤独＞がいくつもオークションに出ていた。

出品者ごとに様々な効能をうたっていた。

たとえば

　＜孤独＞
　　防衛機能あり。孤独とは防衛なり。

フロイト氏のその出品は落札されたが
すぐに、
落札者のこんな評価

　ぶ厚いオーバーコートのはずなのに、
　着こむほど凍えそうじゃないですか！

同じ出品ばかりが、たくさんあった

例えばこの
ひとり、部屋で留守番する少年の
画像がポツリと貼られた、

　＜テレビを見るという孤独＞。

あるいはこの
ひとり、アパートで横たわる老人の死骸の
画像をひっそりと省略した、

　＜気づかれぬという孤独＞。

　……

近年増加中の出品がまた目を蔽う。

「孤独力」と名付けた出品が、救いあり気に立ち並び
今、さかんに入札されている様子
落札者からの評価はまだない

おそらくきっと、
マスクをつけた人々のように、街に＜孤独力＞をつけた人々が
ぽつぽつだんだんふえて行くだろう

こんなに盛んに出品／入札されてるのだから

　　＜友情＞の出品は

見あたらなかった　本物は。

揺れる動的

＊

米メリーランド州フォートミードの米国家安全保障局（NSA）が、インターネット未接続のコンピューターでも遠隔監視できる秘密無線技術を開発し、実際に情報収集していた事が報じられた。

＊

見てはいけないとは分かっていても、誘惑に負け、見てしまうのが、彼の携帯。不安な彼女は、裸は見せながら、素顔は見せないくせに、ついつい、そこに置かれた携帯の誘惑に負けてしまうのだ。

＊

深刻な悩み、切羽詰った事情、知られたくないセンシティブな情報が、見られる者の方にあるとき、携帯の持ち主を越えて送信者の私事までを勝手に暴き見る土足の神経が、見る者の方にある。

＊

刑法133条には該当しないとはいえ、やたらと鼻の穴に指を突っ込む罪だって刑法には該当しない。そこにあるのは『戦争の祈り』。

＊

ポーと並ぶアメリカ文学の巨星マーク・トウェインの短い小説。兵士である夫や息子、恋人がどうか無事に帰ってきますようにと祈ること、つまり戦争に勝つことを祈るのは、その裏で、敵の敗北、敵地の破壊、相手兵士とその家族の残酷な絶望を切に望むことに他ならない。そう叫ぶ神の使いは狂人として無視される。

＊

古代中国の諸子百家は、〈人間の本性〉とは善か悪かを議論した。性善説の孟子は、人は先天的に仁・義を具える善なものとするのに対して、荀子の性悪説は、人は本性悪であるから礼儀法律によって秩序維持を図るべしと考えた。

＊

京都大学のある研究グループが、赤ちゃんは8割が「性善」であると発表したけれど、成長するとやがて、なるべく税金は払いたくない「性悪」になるのさと主張を譲らないのが税法で、性悪説に立脚し租税回避の悪は許さぬと、実に細かく法の隙間を埋めまくっている。

＊

性善じゃなかった2割の赤ちゃんはどうなるのだろう。「きちんと付き合おうよ」と、思い切って言う彼女に、君は他の女と比べものにならないくらい大切なんだ、君とは絶対に別れたくない。だから付き合うのは止す、と抜け抜けと言う小悪魔男子になったりするんだろうか。

金利はちょっとのくせに、セルフサービスのATMで手数料1回100円もとる銀行システムを考え出すマモニストになるのだろうか。

＊

生まれ持った性質などどちらでも、四十歳を過ぎると良い人は顔に出るらしい。四十歳を過ぎると悪い人は確かに悪顔をしている、そんな面相本性論を支持したい。

生まれた時より、死ぬときに、自分の本性の足跡が見えるだろう。たとえ、今朝の満員電車で、足を踏まれたハイヒールの主に、踏みましたよね、と目で問えば、エエ、踏みました、踏みましたけど、と目で返される日々を乗り継いだ果てでも。

＊

夜、コンビニやハンバーガーショップに入れば、店員がそこかしこで寝そべったり、冷蔵庫でふざけたりするその姿と、無邪気な表情を自分でネットに公開しては、思わぬ波紋を広げていたりする。レジにいた弁護士の客が企業のリスクマネジメントやコンプライアンスを強化すべきだと、注意したら、みんな一斉に社内研修に行ってしまった。

＊

最初の講師に招かれた孫子が言う。負ける集団には規律の崩壊、モラルの低下がつきものだ。そういうのは天による災いではなく、将軍の落ち度であり即ち、人災であると。

＊

続いて二人目の講師、韓非子が言った。性善説のように王の人徳で国を治めるやりかたでは、不祥事は防げない。賞罰を明確に規定し、事細かな行動規制マニュアルを作るべきだと。

＊

会場は盛り上がり、「採用した秦帝国はわずか１５年で崩壊してますが、どう考えますか」と、役員からの熱い質問の後で、「過剰にロックオンされるのって面倒臭いから当たり障りなく仕事していきたい。実のところ、自分の好きな男子以外にはほっといて欲しいってのが女子の本音だと思う」というOLの意見に拍手が湧く。

＊

ある日、ライオンが鼠を捕えたが、ふと恩情が湧いて逃がしてやったところ、今度は自分が罠にかかり絶体絶命のところを鼠に助けられたというのが、イソップ童話〈ライオンと鼠〉。この話の解釈が日本人とイタリア人では違うのだという。

＊

日本人は、人を助ければ、巡り巡って自分も助けられるという教訓を読む。ところが、イタリア人は、あなどっていた奴が意外な力を発揮するから気をつけろ、と読むそうだ。同じ話を発信しても、受信する方はまちまちだ。情報の発信には思わぬ波紋がつきまとう。

＊

5年も前に別れた元カレが結婚したのをFacebookで知り、彼の奥さんのページをチェックするのが日課になって、アップされた写真を通して、結婚式の様子から子どもの成長までを逐一知ってる腕利きスパイな元カノの存在などきっと想像すらつかない。

＊

世界で最も普及している除草剤グリホサート系の農薬が、突然変異の雑草「スーパーウィード」をもはや駆除できず、遺伝子組換え農場で繁茂している。除草剤の過剰使用が原因だと、多くの科学者が指摘しているが、もうクスリをやめられない、アヘン戦争のような状況。

＊

さらに悲報もエスカレート。害虫もまた耐性を持ち始めているという研究が英国の科学誌に報告された。栽培者が専門家の指示に従っていない地域の話だという。ポイントは「避難所」の有無らしい。

＊

耐性遺伝子は劣性であるから、両親の両方から引き継いだ場合のみ、作物への耐性を持つことができる。つまり耐性害虫同士が交配するほど、耐性害虫が繁殖する。父か母のどちらかが通常害虫でありさえすれば、耐性害虫は減ってゆく。なので、通常害虫が多くいる「避難所」の設置が必要なのだ。

＊

片方が善人だと片方が悪人というカップルが多いような気がするのはこれも進化生物学のリクツなのか？

＊

片方は放任タイプで、片方が束縛タイプなんかだったりすると大変だ。放任されたいのに、鍵のかかった部屋の中で手錠にロープで窮屈になり、束縛されたいのに光も音もない夜の海のまっただ中に置き去りで異様な不安に怯えねばならない。お互いうま

くいかないのに、好きだから苦しむ。避難所で不倫してないか、と携帯が気になってくる。
＊
　ある男と出会って、幸せな家庭が築けるか、不幸にも破綻するかは、結果でしかわからない。すべての女性が、事前に知り得ないこの、母子家庭になる潜在リスクを抱えている。不安であるに違いない。
＊
　米エモリー大学の研究チームは、男性の睾丸が小さい程、おむつの取り替えなど育児参加に熱心であると発表した。この論文の主著者である同大人類学部准教授ご自信の大きさは不明だが、裏を返せば、睾丸が大きい男ほど浮気だということを意味する。
＊
　狂人の言と無視されてもいい。世の女性たちに愛を込めて言おう。携帯電話を覗き見る必要なんかないのだ。携帯を覗くその前に、彼の真ん中で揺れている動く標的をスコープで覗いておきさえすればいい。

傷口からようこそ

今にも零れ落ちそうになりながら
透き通った眼が《みてる》
語りたそうに、　何かを

引き裂かれ　たフォ
ルムから

理由のない色彩が、微笑む
反り返った
ペルソナの
脇
から

透き通った眼球が

零れ落ちそうになりな
　　がら
こっちを《みてる》
語りたそうに、何かを

左右のポケットの
裏を返すと
　まあたらしい
時間の白骨が　床に
　撒き散る

今も、零れ落ちそうになりながら
透き通った眼が
　　《みてる》
語りたそうに、

　　何かを。

GeraGera

窓の外で詠う小鳥たちの可憐な魂の囀りに付き添われた夕陽がいま、音と光と一緒になって、開け放った窓から、目を細めたくなるほど染み込んでくる。西欧風の苦い焦茶で統一されたこの書斎の奥のほうまで、燃え潤んだオレンヂが浸たすと、一番奥にある傷だらけの棚に置かれた古いアルバムも、降り積もった埃と共に一層懐かしい色へと染まった。

その部屋の中でいま、何やら呻くような風が動いた――。

博士は今、最後の1枚に苦慮していた、学生が提出したレポートの評価に足の小指をぶつけたかのように……。
学生の提出したレポートなど、たちどころに処理してしまう博士の天才をもってしても、否、否、偉大なる天才であらせられるからこそ苦慮せられたのだと思料する。［現代詩の口語訳］の比類なき権威として、多忙を極め続けながらも、なんと、なんと、尊いことであろう、博士は僅かな１阿頼耶ほどの手抜きも、微かな１阿摩羅ほどの妥協すらも良心がゆるさぬ性格（たち）である。今回、学生たちに課した課題の評価は、至極、至極、簡単なもののはずだった。課題は、ただ、単に、現代詩を創って提出せよ、と、ただそれだけだったのだから。それが

それが、一人の学生が提出してきたこの［詩と称するもの］が、天才である博士を、否、博士の天才を、さらさらと光を溢（こぼ）す夏の夜の太陽のような博士の叡智を、手術室でケツを突き出す辛子色のプードルのように悩ませていた。

今、博士の眼下で睨みつけられている、机上に置かれた薄いＡ４用紙一枚の難問とは、下のような学生のレポートなのであった。

//
〔学籍番号　13135655　　所属 文学部 現代詩学科　　氏名／　濃　霧人　　担当者／風 博士〕

（現代詩）　『失われた名著』　濃　霧人 作

問：次のテクストを読んで、下の設問 a に答えなさい。

　U・S・オドワーヨ『現代詩という言語障害』、D・マカッシエ『現代詩はいっそラテン語で書け』。

　この二つの名著が出版された時、両著に共通に示された一つの認識が、騒然と物議をかもしたのは、次の点であった。曰く、
　そもそも、詩は文学であろう。文学とは言葉の美術であることを否定できない。ならば、言語美術が言語障害であること自体が既に、現代詩を文学にしない。（『現代詩という言語障害』4章，346P）
　それは、哲学ではありうる余地を遺してはいても、読者が読んで首をひねるものが何で文学なんであろうか。前衛芸術という特別切符をもらって、文学の片隅にかろうじて小さな席を許される、そんな状況を現実に示してはいないだろうか。しかし、元来、詩とは文学の中心に、文学の核心にあるべきものなのではないのか。（『現代詩はいっそラテン語で書け』2章，第7節，284P）

　勿論著者たちは、言語障害自体を差別などしていない。それどころか、むしろ辿々しい表現が思いの強さを伴って、その困難と闘う姿・行為そのものが感動させうることも否定しない。だが、それを積極的に好んで行うギルドチックな魚眼の営みを、たとえ、「浮遊するシニフィアンによる世界の編み変え」などという美名の元に置いたとてそれは、精神療法上の作業結果が、偶然生みだした名作をシニフィエとするにすぎない。さらに、そんな理屈の蛇口を捻れば、ただの暗号文だって立派な詩としてお勝手に流れ出すというものだ。

　先の２つの著作で、オドワーヨとマカッシエが述べている内容は概略こんな内容である。だが、こんな刺激的なことを書くには、原文を正確に引用する必要がある。そのために、今、本棚をかき回してみたが、どこへいってしまったのだろう、何度探しても見当たらないので作業が先へ進まない。資料が確認できるまで、この原稿の発表は控えておかねばなるまい。掌の傷から熱い涙をこぼしてしまったら、ふたたびあの鐘の音を聴きながら、「T」*と化してサラサレタまま、もう泣くにも哭けないのだから。

（＊註: 「T」=T字形の刑の人＝教会にあるイエス像のこと）

設問 a：上のテクストで紹介された二つの著作の共通認識を受けて創作された 一行詩はどれか、A～Dの中から選べ。

A. 暗喩なき明快な文は詩ではない。大衆への反逆これこそ詩！

B.　現代芸術というのは、その全てが哲学の表現だ、は一理あるが、哲学を表現した猟奇殺人も芸術なのか、彼女の失敗した料理さえも美だというのか。これはもう一行ではない革命。だが、美とは星の数ほどの多様な光の闇

C.　詩人しか読めない「詩」の脱構築の脱構築の脱構築

D.　詩こそ文学と胸を張れない現代詩は哲学にすぎない

※ 注意。これは第一行からこの上の最終行までで 一編の詩です。

〔 学籍番号　13135655　　所属 文学部 現代詩学科　　氏名／　濃　霧人　　担当者／ 風 博士 〕
//

博士の額に、わずかに汗が浮かんで見えるのは私の気のせいであろう。言葉を肉体とする博士に限ってありえないことだ。懐の広い風博士は流石、その道の大家、現代詩の化身とも称される方である。一流の詩人でもあり、批評家でもある音に聞こえたその評判を裏切らず、世の凡庸な感性の束が、狭い視界の硬いヘルメットをつけたまま、棍棒を振りかざすような愚とは無縁で、眼光鋭く、「きわどい形式ではあるが」と前置きしたうえで、　・・・・そこで、おや、待てよと、ここで紹介された2冊の書物を確認しなくては、と思い立ち、あらゆる詩の書籍が揃った書斎の棚を探し始めたのだった。

風博士はいつもそうであるように気狂ともいえる奇矯さで、しかし独特のリズムをともなった作業へとりかかった。

膨大な書物をちぎっては投げるように、これでも無い、これでも無い、と後ろへつぎつぎに放り投げ、まるでゲラゲラ笑うように口元をゆるめた分厚い本たちが、次から

次へと宙に舞い上がるジャグリングの嵐舞を、当の博士は一向気に留める様子もなく、一心に目的の本探しに夢中である。そのリズムと、言い知れぬ不可解な余韻が何か日常でない不条理までもこちらに投げつけてくるが、博士の方は探せども探せども、楽にならず、目当てのモノはまったくみつからない様子で、そのうち、よくよくよく見たら！風博士の姿自体リズムの他はどこにも見えない。

雪と雨とぬくもり

　　雪が降りしきる　雪が降りしきる
　　雪が降りしきる　雪が降りしきる
おれを除いて　皆の上にだけ　降りしきる
なんで　こんなに　さむいのか

　　雪が降りしきる　雪が降りしきる
　　雪が降りしきる　雪が降りしきる
おれの上にだけ　降りしきる
なんで　そんなに　冷たいのか

雪が雨にかわる
　　雨が雪を溶かす
あの白は
　どぶどぶの
　　灰になり
黒く溶け出た現実が
おれを助けにきた、というのか

重く沁んだ上着が肩に被さり
ドブドブな泥濘が足先を滲み掴んでも
黒く溶け出た現実が
おれを助けにきた、というのか

カラリ晴れた　気まぐれな運命と

行合う日付の　アポが取れずに
おれの手帳は　花も実もない

一番近くにある

ぬくもり迄

歩くだけさ

黒く溶け出た現実の
一番近くにある

ぬくもり迄

歩くだけさ

靭やかに眠れ

今夜、お前はそっと　ひとりで
月を眺めているだろう
暗すぎる闇が、光を　くっきりと
冷酷に尖らせて　お前の
怒りも　恥も　虚しいほど
照らし出してやしないか
どこかの家から
　流れてくるピアノの一音一音が
銃弾のメロディーを奏でて　胸を
蜂の巣に叩きのめしてやしないか
今夜、俺のこの両手が
お前のその眼とそして耳をしっかり
塞いでやれなくてすまない
お前を強く抱きしめたまま俺の背中が
盾になってやれなくてすまない
お前が、今見上げたその空は
いつもこの俺がじっとひとりで見つめてる空だ
こんな夜にかぎって
まだ見ぬ透き通ったお前が頭に指を当てがって

何ひとつ答えをくれぬ部屋の中に
突き刺さった　孤独の破片を　吐き散らしては
砕け散った　氷心の欠片と一緒に　掃き集めている
そのパジャマの袖からのびる寒く凍えた手を
暖かく握ってやれる日はいつ来るのか
空へと必死に伸ばして何も掴めない手は　いつも
握り込んだ心苦で　ベトベトに行詰っている
 だったら
全部捨ててしまえ　いっそ
そして
眠れ
　靭やかに
化粧鏡の前で　涙の痕を乾かしながら
生きてゆく傷みを　絶望の布団にくるんだそのままで
俺が傍へ駆けつけるまで
俺達ふたりが出逢える時まで
どんなに
花びらが　苦くてもかまわない

　さもなくば　きっと
硬く　凍りついて眠るお前のことを
化粧鏡がジィと見てる

　さもなくば　ずっと

お前が籠った　棘だらけの不信の殻を
俺は抱きしめたまま離さない

　さもなくば　やっと
しなやかな眠りの中で朝の門が開く鍵の音を聞き
飛び込んだ俺と入れ替えに
ぞっとする夜が慌てて出ていくうしろ姿を
お前とふたりで蹴りとばそう

救いなき世界を　朝の雨が　何％か洗い流す
その優しさの奇跡に便乗して

やわらかく包みこむタオルにさっぱりとした
お前がはじめて魅せる真の笑顔を、そのとき
　俺は、何の形容詞も付けずに全部、感じ取りたい

HAYABUSA

晩冬の、めずらしく快晴となった空に、恐ろしく強い風が吹いている。

右には、頂の近い小さな山々が、ずっと横に連なって長く、左を見れば、向こう岸の近い細い川がどこまでも流れる。右手に見えている山の下裾と、左手に見える川の土手裾に、それぞれ、農家ではないありふれたごく普通の住宅が、木々や空き地、むき出しの線路やバス停、野草と花たちを立ち跨ぐ看板などと混じって、密度ほどよく、どこまでも、どこまでも現れてはまた消え、そしてまた現れては消える。その連続が向かい合う丁度その真中を貫いて、こんな田舎の街外れには、とても相応わない、贅沢な、かなり新しい、作られたばかりの、車幅四台分２車線の舗装道路が、まっすぐに一本通っている。

この快適な道路には、他にまったく車はなく、私の運転する一台の軽自動車だけが、いま悠然と走っている。好きな速度で、滑るように走りながら、何気なく、ふっと、左手の大きな家のブロック塀から、蜜柑の木が、　"安心しろ、やがて何も変わらない"

と告げるように、樹ち繁る濃緑の葉影に沢山の黄色い玉を点灯させているのが見えた。それを過ぎてすぐの辺りで、道はゆるやかに大きく右に膨らんでカーブし、ハンドルを戻し切らぬうちに、今度は、さしかかった陸橋を登りはじめる。道が、跳ね上げるように高々と地面を上へカーブさせると、いきなり、広がった空の右手で、風と直角に翼を広げ、静止飛行する隼が一匹、私と、軽自動車の窓ごしに同じ高さで並ぶ。

さして大きくはない猛禽の勇者は、風が強すぎるせいだろう、まるで初心者が自転車を練習するときのあの真似できない頼りない揺れ方で、どうにか風に乗るのがやっとだという体で、とても今、話しかける余裕はなさそうだ。だが、力一杯ひろげた小さな翼は、風の強さに、めげることもなく、揺れる我が身に、恥じることもなく、いま、全力で、胸を張り、全霊で、風に向い、カラダひとつで、強風に煽られ、寒そうに揺れながら、だが、当然のように宿命を飛んでいる、彼の、姿。

ガラス越しのわたしは「寒くないのか、鳥は・・」 と、ふいに心配が沸く。

「誕生日には革ジャンをプレゼントしよう、サプライズで・・」

すぐに、
道路は大きく下り始める。
見通しの利かない道が加速する。
小さな隼を背に、
一台の白い軽自動車が、悠々と宿命を走り続ける。
　ぐんぐんと、
滑るように落ちながらも
目的地を夢見て
対向車線をハミ出した大型トラックの酔ったクラクションを聞きながらも
誰かを乗せた救急車のサイレンに道を譲って
脇でICが搭載されたボールで遊んでいる子どもたちを微笑みながら
無理矢理連れだされ散歩させられている老犬を憐れみながら
冷たい光と強い風の中を
一台の白い軽自動車が、悠々と、当然のように宿命を走り続ける。
小さな隼を背に。

“超[現代]詩”宣言

http://p.booklog.jp/book/100575

著者：ハァモニィベル
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/harmonybell/profile

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/100575

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/100575

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ